



TITLE:

<書評> 金坂清則著『ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 In the Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel』平凡社，2014年9月，162ページ，A4判，定価3,600 円(税別)，ISBN978-4-582-27812-5

AUTHOR(S):

小林, 繁男

CITATION:

小林, 繁男.<書評> 金坂清則著『ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 In the Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel』平凡社，2014年9月，162ページ，A4判，定価3,600 円(税別)，ISBN978-4-582-27812-5. 地域と環境 2016, 14: 123-127

ISSUE DATE:

2016-12-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/224925>

RIGHT:

書 評

金坂清則著『ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 In the Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel』

平凡社, 2014 年 9 月, 162 ページ, A4 判, 定価 3,600 円 (税別), ISBN978-4-582-27812-5

小 林 繁 男

はじめに 2 つの疑問で始めたい。ツイン・タイム・トラベルとは？イザベラ・バードとは？これがその 1 つ。そして 2 つ目は、旅という手法を使つての歴史の探索が、個々人の現在の生活や「地域と環境」の研究にどのように関係するのか？である。私は、「森林伐採による生態系へのインパクト」の研究から「熱帯林の修復と森林と共に暮らす地域住民の人間安全保障」の研究や「温暖化対策としての非木材林産物の半栽培化」などへ研究を広げ、人間の生存基盤と関係する森林を主題としてきている。このような研究にあつては地域を限定せず、森林がある地域・場所でありさえすれば、世界中どこでも調査してきた。つまり、研究方法の基本は、必ず対象フィールドへ行き、データをとることである。これは、旅に似ている。しかし、旅とフィールド調査とはどこが違うかと考えながら、本書を読んだ。すると内容は非常に面白く、とりわけその方法がユニークであることがわかった。もし、他分野の研究者が協力してこの方法の適用を試みたら、どこまでこの方法論を拡大し得るかには興味深いものがある。そこで、写真集としての面白さだけでなく、方法論の有意義性とフィールドにおける観察の重要性も踏まえ、「地域と環境」に関する研究者、学生に向けてこの書評を記す。また、このような背景を負荷してみた旅にどのような面白味が存在するのかについても考えてみたい。ちなみに、金坂氏（以下、氏）は京都大学大学院・人間・環境学研究科教授を経て、現在は京都大学名誉教授である。

本書は写真集である。専門的には写真について何も学んでいないとのことであるが、氏の技術による切り取られた景観写真は美しく、主題も明確で、非常に興味深い。だが、単なる写真集ではない。まず、自ら紡ぎ出し商標登録までしている「ツイン・タイム・トラベル」というもの（概念・言葉）を基礎におく研究、フィールドワークを不可欠とする氏の研究の実践の最も直接的な成果物でもある。氏はツイン・タイム・トラベルを「過去の旅行記に描かれた旅の時空と現在に生きる私たちの旅の時空を後者に主体性をもたせて重ね合わせる旅」と定義している。敢えて追体験という言葉を用いないところに、過去の旅行記に引きずられるのではなく、それを、多様なはずの私たちの旅に、従属的にでなく主体的に生かすことが必要だという氏の考えが息づいている。

片やイザベラ・バードは1831年に生まれ1904年に没した英国の旅行家である。旅行作家と紹介されることもあるのは、多数の旅行記を書いているからであろう。日本では明治初期に北海道への旅をした人として知られているが、この知られ方は不十分であり、1854年から1901年まで、実に半世紀近くも世界を旅している。本書は、氏がその彼女の旅から96～154年後にその旅の世界を旅し、彼女が旅行記に記した文章を、対応する1世紀前後後の風景写真と対比させたものである。それぞれの文章と写真の組合せからツイン・タイム・トラベルの面白さを味わえるようになっている。そして、そのような組合せがバードの1854年の旅から1900～01年の旅まで、氏が1994年から2010年に撮影した120点以上もの写真を通して味わえるところに、他に類例がないと思われる本書の魅力がある。しかも、氏は、バードの文章に加えて、彼女の旅行記中の銅版画や自ら撮影した写真とも極力対比できるようにして、ツイン・タイム・トラベルの面白さがより伝わるようにしている。実はこの成果を、氏は2004年から2014年まで世界4か国の、バードに縁ある15カ所で写真展として延べ2年以上にわたって披露してきた一写真を開催地によりふさわしいように一部差し替えながら。本書はその記念出版物なのである。

だから、本書の中心は、それを紙上に再現した「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 第Ⅰ期～第Ⅵ期」と題する部分であり、全体の75%を占め、写真は、彼女の旅の順に配列されている。それに続く「旅の点描」もこれを補完するものになっている。さらにバードの故国、英国に関しては彼女に縁の地を紀行文風^{ゆかり}に写真で紹介するという工夫をこらしている。

このようないわば本論に先立って「イザベラ・バードと本書の誕生」が配されているのも効果的である。ここではバードの生涯が、旅の歷程を中心に集約され、6つの時期の特徴が簡潔に記され、しかも彼女の旅の世界が精緻な地図によって可視化されている。バードの文章・銅版画・写真と対比しながら氏の写真を眺めていく際に役立つ。またこの世界地図は、本論の、各時期の冒頭に配された、撮影地点と旅のルートを示した地図や、より詳細な旅の概略とも繋がるようになっている。最後の「あとがき」には、上記したような写真展がなぜ10年にもわたって世界で開催されてきたのか、その幸運の連鎖の理由の一端と、本書が写真展の記念物として誕生した事情が、謝辞を含めて記されている。なるほど、そうだったのかと思われる。そして、この「あとがき」の前に配された白黒8ページ中の「写真展の記録」と「写真展一覧」も読者のこの思いに資する。しかし、この点にもまして私がいいなと思うのは、「あとがき」のまさに直前に配された「著者撮影写真寸言英訳」である。2ページにわたってびっしりと記された小活字をぜひ読んでいただきたい。説明を加える。

本書を日本語と英語を併記した書物にしたのは、実に広大なバードの旅の世界を最も丹念に訪れた氏の活動の成果の一端を、日本人のみならず世界の人々も味わい、楽しめるようにしてほしいとの考えによるものであろう。だから、バードの文章も当然、原文で記されているのだが、

氏が自身の写真についてもコメントを英語で併記している点は、これとともに、本書にとって不可欠のものになっている。つまり、バードの原文の訳は、翻訳者は異文化の媒介者でなければならないとの信念の下にバードの原著の翻訳・出版に努めてきた著者ならではのものであり、通常の翻訳者が訳せなかったものになっているのだが、「著者撮影写真寸言英訳」はこれとは違った意味で本書の特徴として注目される。

バードの原文にはバードのものの考え方や認識が表現され、銅版画や写真もそれらと無関係ではないわけだから、氏が氏自身の旅に主体性をもたして行うツイン・タイム・トラベルにおいて撮影した写真については写真に関するコメントが付されていることが望ましく、事実、氏の写真の下には日本語でそれが記されているわけであるが、英文については「あとがき」の直前に一括して掲載されている。日英併記の書物ながら、日本の読者にはその英文は通常必要ではない一方、英語で読む読者には不可欠であり、しかも日本語に続けて併記するよりも、後ろに一括するのが、写真集としては文字が多い分、写真のウエイトがこれ以上小さくなるのを避ける意味もあるから、よかったと思われる。寸言の2ページは一般の日本人読者が気づかない点ではあるが、私からするとぜひ読んでもらいたい箇所である。

私は今まで地域研究という学問領域を行ってきているが、氏はここでも英語を超えた地理学者の英語を提示しようと考えたように思われる。言語は生きており、単語の定義としての中核の意味は変わらずとも、その外延にある意味はその言語を使っている人々ともに生活や環境が変わるように変化するとと思われるから、その意味で、生きている言葉はその場・臨場感、現場やフィールドも反映していると思われるのである。氏の文章にはこのような試みが読み取れるように思われる。これこそは、本書に加えられたいくつもの隠し味として逸することのできないものであり、多くの読者もこの隠し味を堪能する楽しみを味わってほしい。

私は今、荒廃した熱帯林の修復というテーマで研究を行っている。一旦、人為で破壊された森林は、この30年間行ってきた研究でも決して再生・回復はしない。しかも、各地域における、森林の荒廃や消滅は、それらの履歴が曖昧なことが多く、かつ前の記録がほとんどない。そのため、なかなかツイン・タイム・トラベルのようにはいかない。しかし、地域の長老相手に話が出来ると、裏山の森林は、30年前はどのような状態の森林であったなど、聞きだせる。自分自身の証拠の乏しい小さなツイン・タイム・トラベルである。そして、しっかりした、歴史的記述のない森林へのこの「ツイン・タイム・トラベル」は、現在ではこの50年から60年前から撮られてきた航空写真、衛星データなどの資料によって、旅ではないがなされる。

次に、氏が同意するかどうかはわからないが、本書に取り上げられた場所を実際にツイン・タイム・トラベルしたり、ツイン・タイム・トラベル的に読んで楽しむには、対象の場所を3つに大別するのが良いように思うので、この点について記す。

その1つは、自然景観として維持されている場所であり、ハワイのヌウアヌ・パリがその代表であるが、他にも、ガーデン・オブ・ザ・ゴッド (U.S.A.)、新瀨の兵書峡 (中国)、や日光の

湯ノ湖（日本）がある。比較的探しやすい。2つ目は、文化遺産として残された場所であり、日光東照宮の陽明門や、一身田の本山専修寺、ラダックのラマユル・ゴンパ、イランのターキ・イ・ブスタン、ソウルの東大門や杭州の御碑亭（中国）、聖カタリナ修道院（シナイ半島）、ラダックの都レーの宗教景観と王宮（インド）などがある。修復などで多少は建物の形が変わったとしても解りやすい。そして3つ目は、日常的な生活空間であり、私はこの日常的生活空間の旅が最も面白いと思う。イザベラ・バードの小屋跡付近とそこからの風景（U.S.A.）や旧き友と語りし宿—中禅寺湖畔に私はツイン・タイム・トラベルの凝縮を観る。チベット族の民家（中国）なども逸せない。

ツイン・タイム・トラベルとは、時空間だけでなく、そこでの人々の生活を旅先で共有するという楽しさを意味すると私は考える。また、この言葉に含意されるタイムラグを持つ時間に興味をひかれる。これは単なる歴史的認証行為であるのか、本書を読んで考えていただきたい。さらに、本書の直後に著者が平凡社新書の一冊として出した『イザベラ・バードと日本の旅』を併せ読むとさらに面白い。

旅は楽しみを伴う。それは、日常生活と異なった時空間に自分を置くことによって得られるものである。国々や地域によって、同じ1時間であるのにその進み具合が異なることに旅の面白さを感じる。それは自分の生業・生活が安定している時であって、それ以外の旅は苦痛でさえある。フィールドワーク研究をする者も旅をする。それは、生業であって、目的的でさえある。さて、時間の合間における関係に時間を共有せずに、人間の活動場所を旅行すると、何が観えるか？それは、自分であると思える。私たち森林生態学者は、四季折々の同所における森林を観察する。これをフェノロジー（季節相）の研究と考えている。しかし、その間にも人間の行為が影響するために自然自身だけで、自然は四季を迎えない。人間の行為と自然を考えるために、この「ツイン・タイム・トラベル」という概念は非常に興味深い。

本稿の冒頭で私は旅と私が行ってきているフィールド調査とはどこが違うのかと記したが、実は、氏のツイン・タイム・トラベルは、フィールド調査でデータをとることを必須のものと私の方法論と基本的に通じる。それに加えて、私の研究の場合だと、長老からの聞き取りや50～60年前から撮られてきた航空写真によって最長半世紀前に遡れる歴史を、氏の場合には一世紀以上も前まで、しかも氏の写真のベースとなるバード自身の文章によってたどれる。その上バードの旅行記は今や古典であり、古典にはもっと古いものがあった時間的制約がないから、古典と結びつけるツイン・タイム・トラベルは、古典の読み方を変えるものにもなる。そして「古典」はどの国にも民族にも必ずあるから、私にとっての森林研究と同じで、地域的制限がない。こう考える時、ツイン・タイム・トラベルという概念の面白さと適応可能性の広さは明白である。

本書においてバードの文章として引用する彼女の著書の初版本（氏の所蔵）がカラーで紹介されているのもありがたい。バードと氏の旅を同時に味わうのに有効である。学術研究のため

に編み出されたこの概念が、同時に一般の人の旅にも役立つものである点に、この概念の面白さがある。先に非常に興味深いと記したのはその故でもある。10年ほど前に、私の同僚だった平松幸三教授の科研調査の研究会で氏の発表を聞き、方法が自然科学的であることを知り共感を覚え、その後の懇親会で盛り上がったものだが、本書の一部がその科研研究のフィールドワークの成果であることも心に残る。

（京都大学名誉教授 現 京都大学 東南アジア地域研究研究所 連携教授）